高校生が赤ちゃんを抱っこしてみたら

中谷勝哉

(近畿大学総合社会学部)

キーワード: 接触の経験 乳児の可愛さ 育児の構え

When high school girls hug a baby.

Katsuya Nakatani

(Kinki University)

Key words: contact experience, baby cuteness, set for baby care

目 的

育児に対する動機づけや自信、知識やスキルなど、心理的準備状態の総体を、ここで育児の構えとよぶ。それは、根本においては遺伝的プログラムに裏打ちされているが、適切な経験によってスイッチ・オンされなくては十全に機能しないような機制だと想定される。その機能の不全によって、いわゆる育児不安や育児ストレスといった育児の困難さが増幅されるということもあるだろう。現在の少子化・核家族化の広まりわたった社会では、女性が子を持つ以前に乳児と接触する機会が少なくなってきたようである。中谷・山本 (2005) は、4 か月児の母親の感じる育児の困難さが、子をもつ前の乳児との接触経験の少なさと相関していることを明らかにした。また Nakatani (2008) は、女子大学生による乳児の可愛さの認知と、乳児との接触経験との相関を検討し、性成熟後の接触の効果が大きいことを検証した。これらを受けて、本研究では乳児との接触が可愛さの評定を増すという仮説のもとに、実際に女子高校生に乳児との接触を経験してもらった。

方 法

実験は、①接触前に乳児の画像や音声を評定する対照実験、②乳児と接触する接触実験、③接触後に乳児の画像や音声を評定する検証実験から構成された。また同時に、接触の経験などを問う質問紙調査も行った。

対照実験と検証実験： 画像は乳児の顔（笑顔、泣き顔、無表情）、手足、授乳、未熟児など。予備実験でそれぞれ等価とされた 17 枚ずつと 6 枚のダミーからなる 23 枚のセットを 2 組作り、各セットを対照実験と検証実験に使用した。音声は乳児のぐずりと啼泣の 2 種類をそれぞれ用いた。集団実験で、刺激は高校の教室でスクリーンとスピーカーに提示した。各刺激について、「可愛い」「構ってみたい」「抱っこしたい」の 3 項目について 5 段階で評定を求めた。

接触実験： 5 か月前後の乳児との接触。導入として、挨拶や声かけから始めて、玩具を使った働きかけややりとり、手足や身体を触る、指を握らせる、そして何通りかの姿勢で抱っこするなど、実験者の指示に従って行った。乳児は、原則的に授乳後で覚醒していた。一連の接触の時間は 10 分を目安としたが、乳児の状態などによっておよそ 3 分から 12 分までとなった。

質問紙調査： 予備実験の結果から選んだ「赤ちゃんを抱っこしたことがある」などの経験項目が 15 項目で、いずれも幼児期から小学生までと、中学生以降について分けて回答を得た。他に、フェイスシートと「泣いている赤ちゃんは好きではない」など 17 項目の認知項目などで構成した。

参加者： 対照実験と検証実験には、高校 2 年生の女子 78 名が参加した。その中から、天井効果を避けるために対照実験での可愛さの評定値が高すぎない者 24 名を選び、接触群として接触実験に参加してもらった。また、その 24 名と同等の

評定値を示した 24 名を統制群とした。

結 果

対照実験から検証実験への評定の上昇値を指標として接触の効果を見た。「可愛い」「構ってみたい」「抱っこしたい」の平均と、接触実験の所要時間との間の相関を現したのが図 1 である。相関係数は 0.454 で有意であった ($p < .05$)。

図 1 上昇値と接触時間の相関

「可愛い」だけをみると有意の相関はなく、「構ってみたい」と「抱っこしたい」の場合はそれぞれ $p < .05$ の相関があった。統制群との比較のために分散分析を行ったが、交互作用はみられなかった。

質問紙と対照実験とを対照すると、性成熟後の接触経験と可愛さの評定とに強い相関がみられた。

考 察

乳児との 10 分間程度の短い接触経験が、可愛さの評定を上昇させた。それが接触時間と相関していたというのも効果の存在を裏づけている。また、可愛いだけというよりも、構いたいとか抱きたいという密接な接触への動機づけが強くなり、育児の構えの解発との関連を示唆しているといえる。

質問紙調査で明らかになった性成熟後の接触の効果が、実験的手法で確かめられたといえる。しかし実験事態や手続きの統制が不十分であり、参加者の数も少ないので、時間以外の接触の内容でどのような要因が効果をもたらしたのかは不明である。

引用文献

- 中谷勝哉・山本クニ子 (2005). 育児関連ストレスと妊娠前の母親の経験・知識 発達研究, 19, 53-67. .
Nakatani, K. (2008). Baby care experiences and set for baby care. 29th International Congress of Psychology.